

明治時代の産業振興 一 布施家文書からみる湖北の養蚕一

みなさんは、蚕（かいこ）という虫を知っていますか？ 蚕（かいこ）は蛾（が）の仲間（なかま）の昆虫（こんちゅう）で、幼虫（ようちゅう）から成虫（せいちゅう）になるときに繭（まゆ）をつくりまします。大昔（おおくし）から蚕（かいこ）の繭（まゆ）を原料（げんりょう）にして生糸（せいし）とよばれる糸（いと）がつくられてきました。この糸（いと）を使うと、とてもきれいで肌触り（はだざわ）のよい布（ぬの）をつくる（こと）ができるので、生糸（せいし）は多く（おほく）の人が欲（ほ）しがいる商品（しょうひん）でした。

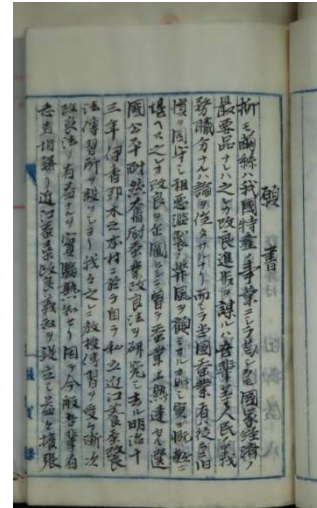
今（いま）の日本（にほん）は、外国（がいこく）に自動車（じどうしゃ）や機械（きかい）を売（う）ってお金（かね）を稼（かせ）いでいますが、明治時代（めいじじだい）には、この生糸（せいし）が一番（いちばん）たくさん、日本（にほん）が外国（がいこく）に売（う）っていた商品（しょうひん）でした。全国各地（ぜんこくかくち）の農家（のうか）の人（ひと）たちが、蚕（かいこ）を育て（まよ）て繭（まゆ）をとる（ようさん）という仕事（しごと）をして、その繭（まゆ）からつくられた生糸（せいし）を、アメリカ（あめりか）やヨーロッパ（ようろっぷ）に売（う）っていたのです。そのため（ため）、養蚕（ようさん）はとても重要（じゅうよう）な仕事（しごと）でした。

滋賀県（しがけん）でも湖北（こほく）（今の長浜市（ながはまし）と米原市（まいばらし））の村々（むらむら）で養蚕（ようさん）がさかん（おこな）に行（い）われていました。しかし、東北（とうほく）や関東（かんとう）と比べると、滋賀県（しがけん）でつくられる繭（まゆ）の品質（ひんしつ）は劣（おと）っていたようです。そこで、明治時代（めいじじだい）になると、農家（のうか）の中から、「みんな（みな）で蚕（かいこ）を育て（まよ）る方法（ほうほう）を改善（かいぜん）して、質（しつ）のよい繭（まゆ）をたくさん（たくさん）つくろう」と考（かんが）える人（ひと）が出て（で）きます。その一人（ひとり）が今（いま）紹介（こうかい）する布施孫（ふせま）一郎（いちろう）です。

布施（ふせ）は自分（じぶん）も養蚕（ようさん）を行（い）う農家（のうか）である一方（いっぽう）で、村長（そんちょう）や県会議員（けんかいぎいん）を務（つと）める地域のリーダー（ちいき）のような立場（たちば）にあり（あ）りました。そのため（ため）、養蚕（ようさん）を発展（はってん）させること（こと）で、村（むら）を豊（ゆた）かにしよう（し）と考（かんが）えていた（い）のです。

今（いま）から141年（ねん）前の1885年（ねん）（明治18年（めいじ18ねん））に、布施（ふせ）が中心（ちゅうしん）にな（な）って「近江蚕桑改良義社（おうみさんそうかいりょうぎしゃ）」という会社（かいしゃ）がつくられ（つく）りました（写真は、会社（かいしゃ）の設立（せつりつ）の許可（きょか）を県（けん）にお願い（ねが）いた書類（しょるい）です）。この会社（かいしゃ）は、農家（のうか）の人（ひと）たちに蚕（かいこ）を育て（まよ）る技術（ぎじゅつ）を教（おし）えるとき（とき）に、繭（まゆ）や蚕（かいこ）の卵（たまご）を売（う）って利益（りえき）を出（だ）すこと（こと）を自（みづか）しめていました。

しかし、この会社（かいしゃ）は、思（おも）っていたほど利益（りえき）を出（だ）すこと（こと）でしな（し）なかつたため（ため）、5年（ねん）ほどで解散（かいさん）してしま（し）いました。それでも、布施（ふせ）は多く（おほく）の農家（のうか）に蚕（かいこ）を育て（まよ）る技術（ぎじゅつ）を教（おし）えること（こと）は必要（ひつよう）だと考（かんが）えていた（い）ました。そこで今（いま）度は、養蚕（ようさん）の技術（ぎじゅつ）を教（おし）える学校（がっこう）をつくること（こと）に力（ちから）を尽（つ）くしま（し）た。こうして、布施（ふせ）は2つ（ふた）の農業学校（のうぎょうがっこう）の創立（そうりつ）に携（たずさ）わりましたが、それぞれ（それぞれ）、現在の2つ（ふた）の県立高校（けんりつこうこう）（長浜農業高等学校（ながはまのうぎょうこうとうがっこう）、伊香高等学校（いのかこうとうがっこう））の起源（きげん）になり（な）りました。



【写真】「近江蚕桑改良義社設立願書」

しがけんりつこうぶんしょかんしやうぞう
滋賀県立公文書館所蔵

【明え 251（2-10）】

明治時代の海外渡航 大原重右衛門による欧米茶業視察

大原重右衛門（1861年～1927年）は、明治・大正期に活躍した甲賀市土山町の人物です。幕末に生まれ、明治以後は、政治家として活躍するとともに、県内の産業の発展のためにもたくさんの仕事をしました。

甲賀市は、現在もお茶の生産地として有名です。大原も茶業に深くかわかり、茶業仲間たちの中心人物の一人でした。明治期、お茶は日本の最大輸出品の一つでした。大原は、1897年（明治30年）と1900年に、海外で日本茶がたっくさん売れるようにするにはどうしたらよいか、調べるために欧米（アメリカとヨーロッパ）にむかいます。

この欧米調査の記録からは、現在とは大きくことなる、当時の海外旅行の様子が伝わってきます。パスポート一つをとっても、今日、わたしたちが使うものとはかなりちがいますよね（写真）。また、当時は飛行機ではなく船で海外へ行きました。大原は旅行中に日記を記していますが、欧米現地での出来事だけでなく、船旅の様子もくわしく書いています。

欧米での調査を終えて、大原はどのような考えをもったのでしょうか。このころ、国内の茶業は厳しい状況にあったようです。大原の茶業仲間も、世間の関心が茶業からはなれていっていることを心配しています。しかし同時に、海外での販売拡大のため、茶業者が「不撓（くじけないこと）」の精神で改良に取り組むならば、茶業の将来は明るいだろうと述べています。

大原は、日本茶の輸出成功のためには、インドのセイロンティーが市場を独占する前に、日本茶の取引先を広げることが大切だと感じていました。そしてその具体的な方法も考えています。当時、日本茶を海外で売るため、アメリカに「出張所」がありました。この出張所を今度はヨーロッパにも進出させることを主張し、具体的な費用の計算も行っています。一方で、アメリカの出張所については、必要な費用の節約や、日本からの補助金なしでやっていける経営方法を確立することを訴えました。大原は、ヨーロッパで新たに日本茶を売り出すことを目指すと同時に、アメリカで日本茶販売を安定して継続できる道を求め、努力しました。



【写真】「日本帝国海外旅券章」
（大原家文書L 4-2）